

■そこに流派の壁はあるのか？ ～倦怠感を例に～

倦怠感は虚実を判断し、可能なら気剤で対処する

星野 卓之（北里大学東洋医学総合研究所）

昨年 50 周年を迎えた北里大学東洋医学総合研究所には、古方・後世方をともに活用してきた歴史がある。近年はコロナ禍でオンライン診療も行っている。その外来では気剤の運用が特徴的と考えられるので紹介したい。

倦怠感へのアプローチ

藤本 誠（富山大学学術研究部医学系和漢診療学講座）

和漢診療科での診療では、四診を通じて患者の陰陽（六病位）・虚実・気血水の異常などを評価して、治療方剤を選択していく。倦怠感を主訴とする症例には、陰証・虚証、気虚を目標とした処方を選択することが多い。

一貫堂医学で考える倦怠感

矢数 芳英（温知堂 矢数医院）

一般的に倦怠感の原因は気虚などの虚証を背景として論じられることが多い。一方、三大証五方を中心とした「狭義の一貫堂医学」では、清熱剤や駆瘀血剤が必要な実証がその対象となっている。今回はその中でも解毒証体質に焦点を絞って話を進める。

日本語で語る四次元的弁証論治-疲労感をテーマとして-

西本 隆（医療法人社団 岐黄会 西本クリニック）

漢方診療において、「弁証論治」とは、「何が」、「どこで」、「虚して」あるいは「実して」いるかを見極めることであり、さらに、それが「なぜか」を考え、最適な治療法を見つけ出すことである。その過程を楽しみながら、「倦怠感」について考えてみたい。

山本巖医学からわかる倦怠感の病態とその治療について

～特に Long-COVID を中心に～

山方 勇次（医療法人勇山会 山方内科医院）

Long-COVID の倦怠感とは感染後疲労症候群と称されるが、本態は炎症の遷延化と捉える。これには気虚、一貫堂解毒体質、陰虚、瘀血の内因が絡む。そのために治療は補気剤のみでは難治性が多く、炎症を鎮める温清飲加減と駆瘀血剤の合方が必要である。

倦怠感の病因・病機と治法
